

圭介の家は、丘の低いところにあった。

学校や友達の家に行く時は、丘を上がっていかなければならない。丘とはいっても感覚としては、山道を登るのと同じで、坂は急で長かった。また、坂は、真っ直ぐではなく、低いところでグリーンとでっばったように曲がっていた。

学校の行き帰りは歩くので、曲がった坂でも危なくはない。

問題は、自転車に乗って下り降りる時だ。行きは上り坂を、ヒーヒーいながらこぐ。帰りは下りで楽チンのようだけれど、ブレーキをかけながらそろそろと下りないと、最後のでっぱりカーブのところで、道から飛び出して横の田んぼに落ちてしまう。

そのためこの田んぼは、人と自転車がよく落ちる。一度、軽トラックが田んぼへ突っ込んだ時は、おおごとだった。

子供達は、この坂をノーブレーキで滑り降り、出っ張りのところで急ブレーキをかけて、うまく乗り切るといふ遊びをよくやる。これができたら、すぐく満足感が得られた。そして自慢できることだった。ただし、失敗したら「まぬけ」呼ばわりされてしまう。

道と脇の田んぼは、一メートルぐらいの段差があった。道路脇は全面低い田んぼになっている。この田んぼの持ち主は、近所の家山田三郎じいちゃんだ。三郎じいちゃんは、「かたがねえな」と諦めているようだ。

落ちないように、ガードレールでも付けるか？」

と、誰かが言ったことがあった。すると三郎じいちゃんは、「さんでもねえ！」と、手をひらひら振った。

ガードレールにぶつかって、怪我でもしたら大変だ。それよか田んぼに落ちた方がクッションになるべー」

と言った。道をまっすぐにすれば？」という話は何度もあった。でも、最後には、何百年も前のご先祖様が、作った道だ。壊すわけにはいかねえ」

で、終わってしまう。

昔からの道なので、いじってはいけないのだ。と圭介は理解していた。

圭介が自転車で遊びに出かけるときは、いつもお母ちゃんに言われる。

坂だけは気をつけなよ。もう五年生なんだからね。昨日も、よっちゃんが田んぼに落ち込んだよ。なんでブレーキをかけないんだろうね」

いつも言われていることなので、お母ちゃんの言葉は、圭介の脳みそには全然入ってこない。お母ちゃんの言葉は、お経みたいなものだ。

圭介の友達みんなもやっていることだし、圭介も前にちよっただけやったことがある。あときは、スリルがあって、空を飛んでいるみたいでものすごく興奮した。

すんでのところで、転んでしまっって成功はしなかった。

今は五月。なんと十日も続くゴールデンウィークに入った。みんなが旅行だ、何だと浮かれているが、圭介の家族にとって、ゴールデンウィークは関係なかった。

農家をやっているものにとって五月は、田植えの一番忙しい時だと圭介は分かっていた。

今日は、これから裕二を誘って、遊びに行くところだ。

自転車を転がして行くと、門を出たところにハナが、寝そべっていた。

ハナは去年、生まれてすぐ神社の境内に捨てられていたメス犬だ。

柴犬に似ているけど、雑種が混じっていると誰かが言っていた。

ハナは、なんとなくみんなに育てられて、いつの間にか野良犬だけど、みんなのへ

ットになっていた。

お、ハナ。ごはん食べに来たのか？」

圭介のお母ちゃんも、「ハナは、かわいい」と言っっては、ご飯の残り物などを上げていた。

圭介は家に向かって、大声を上げた。

お母ちゃん、ハナが来てる」

はいよ」

お母ちゃんの声が聞こえたので、安心して自転車をこいだ。

裕二の家は、丘の上にある。とはいっても、この坂の下に住んでいるのは、圭介の家を入れて、三軒しかないのです。出かけるときはいつも坂を上がらなければなりません。神社を過ぎたら裕二の家だ。

最近、圭介と裕二は面白い遊びを始めた。

秘密の場所を見つけたのだ。神社の裏にある竹やぶにキャッチボールをしていたボールが入り込んだので、ごそごそ探していたら洞窟のような穴を発見した。竹やぶにうもれていて、誰も気づかずに何十年もそのままになっているようだった。

お父ちゃん、神社の竹やぶに、洞穴があるんだ」

さっそく圭介は、お父ちゃんに聞いてみた。

どのくらいの大きさ？」

豊、三畳ぐらいかな」

圭介が答えると、お父ちゃんが「うーん」と腕組みをして考えてから言った。

昔、おれのとうさんが言っていたな」

とうさんとは、圭介の亡くなったおじいちゃんのことだ。

戦時中に、みんなは防空壕を掘ったのさ。きつとその跡だろう」

それなら何に使っても構わないということだと、圭介は勝手に決めた。

それで圭介と裕二は、粗大ゴミに捨ててあった机や棚などを持ってきて、穴の中に置き、部屋を作った。そしてここをふたりだけの秘密基地ということにした。

今日も、ふたりで秘密基地へ行く約束だった。

ゆうじー」

声をかけると、裕二がにこにこしながら出てきた。

裕二、秘密基地に行こうぜ」

いつもは「オッケー」とかなんとかいいながら、自転車で飛び乗ってふたりで出かけるのだけど、今日の裕二はいつもと様子が違っていているように感じた。なにか圭介に言いたそうだ、面白いことでもあったのだろうか。

圭介、おれさ、ハワイに行くんだ」

「ハワイ？」

いきなりのことなので、圭介の声が上がった。

東京に住んでいるおじさんがいるだろう。あのおじさんが、結婚するんだって。それがハワイでするんだ。だからおれ、明日からハワイに行くんだ」

おじさんとはたしか、裕二のお母さんの弟でカメラマンだ。

急だな」

うん、父ちゃんとかあちゃん、突然言うんだもんない。おれのパスポートもとってあるって。何かにサインした覚えはあるけど、パスポートだなんて知らなかったよ。

ハハ、困るよ」

裕二は、ちっとも困ったような顔はしていなかった。嬉しそうで、笑いが止まらなくて、にやにやしている。

今日、急いで用意しなくちゃならないんだ。ごめんな」

「いつ帰るの？」

「二週間ぐらいだと思う」

「学校始まるぞ」

「うん、学校には言ってる。結婚式が終わったあと、せっかくだから色々観光しようかって話してたんだ」

「おーん、そうか」

「なんだか力が抜けてきた。仕方がないので、

ほんなら、またな」

と自転車に乗って、引き返した。

神社の裏の奥の方に秘密基地がある。その基地の入口は壊れていたもので、圭介と裕二でダンボールや竹を切ってうまい具合に扉にして穴を塞いでいた。

基地の中は、机と椅子があって、棚には漫画の本を並べた。

せっかく楽しい場所を見つけたのに、一気に気分が壊れた。

「おーっ……」

大きく息を吐いた。裕二のにやにや顔が、思い出される。

「なーにが、ハワイだ！」

急にむしゃくしゃしてきた。なにもする気持ちにならなくて、扉を閉めてから基地を出た。

自転車をこぎながら坂の上に来た。この坂をグリーンと飛びたい衝動に駆られた。

坂の上からノーブレーキでシューンと下った。

スピードがぐんぐん増す。

でっばりのところに来た！ 圭介はグーっとブレーキをにぎった瞬間、ふわっとかただが浮いて、空中を飛んだ。その瞬間、後悔した。でも遅かった。

「ずぼっと、ものすごい衝撃で圭介は田んぼに落ちた。」

田んぼは、田植えをしたばかりのぬかるみだったので、深くないが、深くはまって

しまった。からだがなかなか動かすことができない。

「やっこのことで右手を上げ、左手も泥から出した。」

「からだを起こし、ほうのように脱出した。この場所は田んぼしかないところなので、ほとんど人なんて通らない。」

「やっど道へたどり着いた。と思ったらなんと自転車がみごとに田んぼの中に突っ込んでいた。」

「まいったな。あれ、引っ張るの大変だ」

「自転車は引っ張ればとれるのだけれど、泥まみれでとても重くなっている。」

「うーんしよ」

「力任せに引っ張った。重い。」

「うーん」

「ゆっくりだけどなんとか道の方へ近づいた。道は高くなっているの、持ち上げなければならぬ。これがまた大変だ。」

力を込めて「うーん」と上げる。と、ふっと自転車が軽くなった。

「えっ？」

「見上げると、誰かが圭介の自転車を持ち上げていた。」

「すみません」

「とっさに圭介が、礼を言う。」

「いえいえ、どういたしまして」

「ぎこちない感じで言葉が返ってきた。若くて聞いたこともない声だったけれど、圭

介は、ここから脱出することばかりに気を取られていた。

その人の協力で自転車は、道の上に戻った。しかし圭介も自転車もみごと泥だらけだ。やっこのことで脱出できた。

ありがとう」

圭介は素直に礼を言った。

アーノー、問題ないよ」

言ったその人は、見たこともない男の子だった。

えっ！」

びっくりした。茶色の髪がくるくるパーマで、そばかすだらけの顔。高い鼻、笑った口は横に大きく伸びていた。どう見ても外国人だ。

ぼくは、エド。たまたまここを歩いていたら、君が大変なことになっていたから。

どうしたの？」

流暢な日本語なので、面食らう。

えっ、この坂をさ、ノーブレーキで下りたら失敗したんだ」

圭介が坂を指差す。エドは、あぁー」と頷いた。

「ここで曲がっているから、落ちたんだな。うまく考えたもんだ」

何言ってるんだこの外人と思った。

エドは、ハワイから来たのか？」

まだ、ハワイにこだわっていた。

ハワイ？ ちがうよ」

エドはすっとんきような声を出した。

ぼくは、東京から来たんだ」

なんだ、東京生まれか」

ちよっと力がぬけた。

ちがうよ。アメリカのニュージャージー生まれさ」

まあ、そうだろうな」

妙に納得。

君、泥だらけだよ」

圭介は、顔から全身泥だらけだった。エドも手や胸に「恐」とでっかくプリントしている白いTシャツにも泥がついていた。

エド、おれんちに行つて、泥をおとそう」

圭介は、泥にまみれた自転車を転がしながら歩き出すと、エドも一緒に歩き出した。

エドは、いくつ？」

十二歳。君は……えーと」

おれは、十一歳。圭介っていうんだ。エドはおれより一っだけ年上だけど、でかいな。やっぱり外人は背が高いな」

エドは、圭介より十センチぐらい高く大人のように感じた。

外人て言うな」

エドが怒ったようにいった。

だって、アメリカ人だろう？」

もうすぐ、日本人になるんだ」

はあ？」

ぼくは、忍者になるんだ」

疲れるやつだ、……。家族は、なんて言ってるんだ？」

パパはやりたいことをやりなさいって」

ママはなんにも言わないの？」

ママはいつも、がんばりなさいって言うよ」

エドは、「うんうん」と頷く。

エドは、日本語うまいな」

ぼく、日本語学校に通ったよ。先生がとてもうまいって褒めてた。ぼく、首席で卒業したんだよ」

エドは、自慢げだった。

そんだけしゃべれるんなら、じゅーぶん日本でやっていけるよ」

ワーオ！」

エドは、とてもうれしそうに目を輝かせた。

いつの間にか、圭介のいらいらがなくなっていた。

圭介の家は農家で、家は古く昔風の造りなので、庭がとても広い。圭介たちは裏の庭に回って、そこにある水道につながっている、長いホースから水をかけて自転車と体の泥を落とすのに、大分時間はかかった。圭介は全身泥だらけだったので、全部

着替えた。エドには、体が大きいからと、お父さんの引き出しをこそこそ探した。知り合いがハワイ土産だと持ってきた、派手な猫の絵が描いてある、Tシャツを見つけた。

「こんなところにもハワイがある。ケッ！」

うんざりしながら、上半身裸になっているエドに、ぼーんとTシャツを投げた。

服、乾くまでそれ着ててよ。半袖でもいいよね」

ああ、大丈夫さ」

エドは、すばやくTシャツをかぶる。

汚れた服は、水洗いして干した。今日は天気がいいから早く乾くだろう。

ずいぶん、きちんとしてるんだな」

エドが感心したように言う。

まあね、証拠隠滅だよ」

はあ？ ショーコ：インメか？」

そんなことを言っているあいだに、圭介は急いで長靴をはいていた。

おれさ、今から田んぼを直してくる」

そそくさと出かけていったので、エドも慌ててついて来た。

圭介は落ちた田んぼの場所へ行くと、倒れてぐちゃぐちゃになった稲の苗をひとつひとつ丹念に、戻した。圭介自身田植えの経験があるので、それはできる。エドは、

圭介のやることを、興味深げに見ていた。

圭介の作業が終わって、家の方に歩き出した。

これがショーコ：インメか？」

エドがつぶやいた。

証拠隠滅だよ。こんなこと見つけたら、やばいだろう？」

圭介も小声になっていた。

やばい？ そんなにやばいのか？」

エドが、聞く。

ああ、とにかくお父ちゃんが一番やばい」

どう、やばいんだ？」

エドが興味深げだ。

圭介は、歩くのを止めると、エドを見つめた。エドの目の色は、うすい茶色だった。

蔵に入れられるんだ！」

クラ？」

「なんだ、首席のくせに知らないのか」

圭介は偉そうに言いながら、圭介の家の横にある、土蔵のずんぐりした家を指差した。

「ああ、忍者が千両箱を盗む倉庫だ」

エドの目がまた輝きだした。

「変なこと知ってるな。おれんちは、千両箱はないけど」

「じゃあ、米が入ってるんだ。ぼく、習ったよ」

「残念だけど、米は専用の倉庫があるんだ。この中には、古臭いものが入っているだけさ」

「この中に入れられるのか、楽しくないか？」

「ばかか！ いっぺん入ってみる。気が狂って死ぬぞ」

圭介は、エドをギロリとにらんだ。

「おれが幼稚園の時だ……」

と圭介は、話した。

「おれは、幼稚園に行きたくなかったんだ」

「どうして？」

「理由なんてないさ、気分が悪かったんだ。あんまりおれが嫌がるから、お父ちゃんが、車でおれを送ってやるって言ったんだ。お父ちゃんは市役所に勤めているんだけど、一緒に乗せてやるって。仕方がないから、乗ってやったよ。だけど幼稚園についてお父ちゃんが」

「覗いたぞ、降りないのか？」と言ったけどおれは、『いや』って言ったんだ。だって、行きたくなかったからな。」

「そうしたらお父ちゃん『どうか』ってまた車に乗って家に帰った。」

『もう、幼稚園には行かないのか？』

「おれは、行かないって言った。そしてお父ちゃんは、」

「羽かった、そんなヤツはここにいる」って、おれをこの蔵に閉じ込めたんだ。」

「蔵の中って、真っ暗でジメジメしてお化けもいるんだよ。おれ、気が狂ったように泣いたよ。」

「あとでお母ちゃんが、開けてくれなかったら、おれ、死んでた」

「オー、マイ、ゴッド」

「エドは、胸のところで十字を切った。」

「だから」

「圭介はエドに向かって言った。」

「お父ちゃんに見つかったら、やばいんだ。わかるだろう？」

「圭介が田んぼに落ちたことが、お父ちゃんにわかると蔵に入れられるってことか？」

「坂をノーブレーキでおりたらだめだって、言われてたしな。それに三郎じいちゃんのお父ちゃんを荒らしてしまったし、だからエド、これは秘密だぞ。わかるか？」

「わかってんのか？ だれにもいなよ。男の約束だぞ」

「オー、男の約束だ。わかったよ」

「エドは、深刻な顔で圭介と握手を交わした。」

「お腹がすいたので、圭介はお母ちゃんが作ってくれた、おやつのカップケーキをだして、エドとふたりで食べた。」

お母ちゃんの手作りか？ 美味しいな」

エドは感心していた。

で、エドは、なんでこんな田舎を歩いていたんだ？」

圭介は、ずっと疑問だったことを聞いた。

ぼくは、忍者を探しに旅をしてるんだ」

「こんな田舎に忍者なんかいないよ」

「こは、しのぶ町だろう？ 昔忍者の村だったんだ」

そうだったかな？」

いや、まちがいない！」

エドは、はっきり言い切る。

だれに聞いたの？」

だれって、調べたのさ」

そういえばー」

圭介が空を見上げながら言った。

となり町に忍者資料館があるよ。おれが三年生の時に学習見学で行ったことがある」

それだよ！ そこに行きたい」

エドの目が輝いている。

バスで行かなきゃなんないから、バスで十分だ」

行きたい、行きたいーい」

今からだと、遅くなるよ。明日にしるよ」

よし、明日だ！」

エドがひとりで盛り上がっていたら、そこへ

ただいまー」

畑からお母ちゃんが帰ってきた。エドを見るなり、にっこり笑った。

おや、めずらしいお客さんだね」

エドだよ。エド……」

圭介は、エドしか聞いていなかった。

エド・スミスです。よろしく」

エドは、お母ちゃんに握手を求めたので、お母ちゃんはうれしそうにエドの手を握った。

「こちらこそ、よろしく。まあ、大人だねえ。だれかと大違い」

圭介を意味ありげに見る。

なんだよ」

圭介はふてくされた顔をした。

どこからきたの？」

お母ちゃんの質問に、エドが答える。

ぼくはアメリカ人ですが、パパの仕事で一緒に日本に来て、東京に住んでいました。

でもパパがアメリカに帰っちゃったんで、ぼくは残って、旅をしています」

二人旅、へえー、たいしたもんだね。エドくんはいくつなの？」

お母ちゃんが感心して、首を振る。

十二歳です」

「両親は心配していないの？」

その言葉に対して、エドはあっけらかんと首を横にふった。

そう？ ちょうど、今、学校休みだしね」

お母ちゃんは、納得したように言った。

ぼくは今、一ヶ月間の休学をしています」

「へえー、そう。日本語ペラペラだね。圭介より上手いかもしれない。ハハハ」
お母ちゃんが、豪快に笑った。

「なんだよ、それ」

圭介がむくれた。

泊まるところは決まっているの？」

お母ちゃんが聞いた。

「ここに民宿があるって、聞いたんですが」

「ああ、丘の上の方に『のぶ民宿』があるわ」

小さくて、古い民宿だ。

そこに一ヶ月も泊まる予定なの？」

お母ちゃんが聞いた。

「ずっといるかどうか分からない。まだ、計画はたてていません」

エドは外人らしく、両手を開いて肩をすくめた。

「まかったら、ウチに泊まったら？ 田舎家だけこの家、広いんだよ」

お母ちゃんの言葉に、圭介が「へえ」という顔をした。

「どう思う？ 圭介」

お母ちゃんが、圭介を見つめる。

「い、いいよ」

あわてて圭介が返事をする。

エドは、喜んで圭介の家に泊まると言った。

でも今日は、民宿に荷物を置いてあるので、一日だけ民宿に泊まって、明日から圭介の家にホームステイすると出て行った。

エドが帰ったあと、お母ちゃんがひとりごとのようにつぶやいた。

「庭が水浸しだったねー。そこにある自転車が泥で汚れていたよ」

「そんなことないよ、自転車ちゃんと洗ったしー」

言ったあと、圭介は「しまった！」と顔をしかめた。お母ちゃんには、ばれていたのだ。

お母ちゃんはすぐに、残っている手作りカップケーキ三個を紙袋にいれると、圭介に言った。

「さあ、今から三郎じいちゃんのとこに謝りに行くよ」

圭介は、うつむいてうなずいた。

「二応、倒れた苗は、もとにもどしてはいるんだねえ」

お母ちゃんは、圭介が荒らしてしまった田んぼを眺めながら言った。

「おれ、田植えしたことあるし……」

圭介がつぶやくように言った。

「だったら、折れてしまった苗はダメだってことぐらい、分かっているだろう？」

圭介は、しよんぼりとうなずいた。

お母ちゃんは、圭介が倒してしまった苗を新しい苗に植え替えると、すぐに田んぼの持ち主である三郎じいちゃんの家へ、あやまりに行った。圭介もついていく。

「ごめんなさい」

圭介があやまると、三郎じいちゃんは、

「そりゃあ大変だわ。けがはなかったかい？」

三郎じいちゃんは圭介のからだを見回した。三郎じいちゃんは優しい人だ。家の奥から綾子が覗いているのが見えた。

綾子は去年の夏、圭介のクラスに転校してきた。どういう事情かわからないけれど、今は祖父の三郎じいちゃんと二人で暮らしていた。圭介と家が近いので、登校下校を一緒にするように言われていた。でも綾子は、圭介が話しかけてもほとんどしゃべることもなく、だまってうつむいていることが多かった。

自分が男だからうまく話ができないのだろうと、圭介は仕方がないと思っていた。なんどもあやまってから、三郎じいちゃんの家をでると、おばちゃん

と声をかけられた。振り向くと綾子がモジモジしながら近づいてきた。

「ハナいる？」

聞かれてお母ちゃんは、考えながら言った。

朝、うちでご飯食べたけど。神社で寝てるんじゃない？」

神社まで見に行ったけど、いないの」

かの泣くような声で綾子は言う。

「おーん？ どこか新しい場所を見つけたのかな？」

お母ちゃんは、頭をひねった。

今日は休みで、学校には生徒がいないとハナは知っているはずだ。

明日の朝、ご飯食べにかならずうちに来るから大丈夫だよ」

お母ちゃんが、明るく言ったので綾子は、やっとこくんとうなずいた。

神社の境内に捨てられていたハナを、最初に見つけたのは綾子だ。綾子はいつもひとりで、神社にしよんぼり座っていることが多かった。

ハナを見つけてからは、綾子は付きっきりで世話をした。ハナという名前をつけたのも、綾子だ。

「ハナ？ だせえ名前」

うちのおばあちゃんの名前だよ」

みんなは口々にけなしたけれど、綾子が「ハナ、ハナ」と呼んでいるうちに、自然にみんなもハナと呼ぶようになっていた。

そしてみんなで、ドッグフードやおにぎり、パンなどを持ってきては、ハナにあげたりしていた。

そのうちハナは、どんどん大きくなって、みんなのペットになった。その中でも一番一生懸命に世話をしたのは、綾子だ。

圭介と綾子が登校する時間になると、ハナは寝泊まりしている神社から降りてきて、圭介と綾子と一緒に学校まで歩いて行く。そして圭介たちが下校するまで校舎で待っていた。

それを見て誰かが「忠犬ハチこうみたいだ」と言った。

校長先生は、学校のグラウンドでウロウロしている、ハナの事情を子供たちから聞いていたので、微笑ましく見ているようだった。

一部の親からは、

「学校に野良犬を入れるのは、衛生的によくありません」

など意見があったが、父母会でハナのことを話したら

おとなしい犬だし、子供たちの情操教育としていいのではないか」

ほとんどの親は、受け入れる意見が多かった。

異議のある親には、「番犬にもなりますから」と校長先生は言ったようだった。

次の日、ハナは圭介の家にはこなかった。

かわりにエドが、大きな荷物を持ってやってきた。

「はい、圭介、お母ちゃん、お世話になります」

エドは、はちきれそうな笑顔を圭介とお母ちゃんに向けた。

「あら、いらっしやい。部屋は客間を使ってちょうだい。じゃあ、私は畑に行くからお母ちゃんは家を出た。」

「はい、わかりました。ありがとうございます。行ってらっしやいませ」

エドが、にこやかに手を振る。

エド、この部屋を使ってよ」

圭介は客間に案内した。この部屋は、圭介の死んだおじいちゃんが使っていた。仏壇が置いてある八畳の部屋だ。床の間のある一番いい部屋なので、客間になっている。お客さんが泊まっていくことになったら、この部屋を使ってもらっていた。

「すばらしい、侍の住んでいた部屋だ」

エドは、床の間がすっかり気に入ったようだった。

「こは、死んだおじいちゃんの部屋だったんだ」

仏壇には、黒い着物を着たおじいちゃんの写真があった。それを見たエドが、目を輝かせた。

「おじいちゃんは忍者だったのか？」

「さあ？ よく知らないな」

「そうだよ、まちがいないよ」

着物を着ているおじいちゃんが、エドには忍者に見えたらしい。

「そうかな」

エドがそういうから、そんな気もしてきた。

「なあエド、よくお母さんが、ひとりで行くことを許してくれたね」

「ママには言っていない」

「えっ？」

「ぼくの両親は離婚したんだ。ぼくはパパと暮らしている」

圭介は、エドは明るいけど複雑な事情があるんだと、気の毒に思った。

「パパにお願いしたのさ。ぼくは日本に行って、忍者とポクえもんに合わないと、死んでしまおうって」

「ポクえもんは、まんがのキャラクターだ。」

「忍者はどうかわかんないけど、ポクえもんは、完璧じゃないよ。エドって案外幼稚なんだな」

「ヨウチ？」

「子供だっただよ」

「ぼくは、子供だよ。圭介だっただよ」

「もっと、小さな子供だっただよ」

「エドは、急に真顔になった。」

「ポクえもんは、本当にいないのか？」

「残念ながらポクえもんは、アニメのキャラクターだから実際にはいないよ」

「そうか」

「エドは、がっかりしたようにふーと息を吐いた。」

「圭介はそれをあきれ顔で見ている。」

「でも、忍者はいるだろうか？」

「エドがすかさず聞いてきた。」

「忍者か……いるかもしれないな」

「いるいる、いるよ。だって、ここは忍者の村だもの」

エドが急に元気になった。

圭介は、忍者の子孫だよ」

「そうかなー」

圭介の家は、ずっとずっと昔からここに住んでいるんだろう？」

「まあ、そうだけど……」

圭介のおじいちゃんは、ここで田んぼや畑をやっていたとは聞いていた。きっと昔から農業をやっていたんだろう。でも、エドには忍者だと言っておいたら喜ぶだろう。

「そうかもしれない。よくわからないけど」

というとき、エドは満足げにうなずいた。

明日、エドと圭介は、忍者博物館へ行くことに決めた。

忍者博物館は、年季が入っている建物で古臭かった。

圭介はここに来たのは二回目だったけど、「こんなにぼろかったかな？」と改めて思いながら見ていた。

入場料は子供が二百円で、この値段ならまあ、こんなボロでも許せるかと思った。中には、昔忍者が使っていた防具とか、一通り展示していて、エドのテンションは上がりっぱなしだった。覆面や短い刀、手裏剣などにいちいち大声を上げる。

「オー、フクメン！」

「カタナ！」

「オー、すばらしい。シュリケン！」

ここは古ぼけたところだから、見学者はほとんどいなかったけれど、圭介にしてみれば恥ずかしい。

「エド、もうちょっと静かにしろよ」

注意したけど、エドはお構いなしだ。

「オー、グッド、これだ、本物だ！」

大騒ぎする始末。

そんなことが続いていると、向こうの入口からひとりのおじさんが、圭介たちの方に向かって歩いてきた。

「あまりうるさいから、ぼくらに注意をしに来るのだろうと、圭介は覚悟した。

よくわかっていない外人が一緒なので、許してもらおうと思った。

「君たち」

おじさんが声をかけた。

「はい、すみません。エドはアメリカ人で、よくわからないんです」

圭介は、すぐにおじさんに言った。

「へえー、アメリカ人なの？」

おじさんは笑っていた。

「はい、エドです。よろしく」

エドがおじさんに握手を求めると、おじさんは握り返した。

「わざわざよく来たね。忍者に興味があるの？」

おじさんは嬉しそうだった。

「ぼくは、忍者になるために来たのです。あなたは忍者をご存じですか？」

おじさんは、ニコニコ笑っていた。

「忍者の修行をしている人なら、知っていますよ。その前に、ここに展示しているものを説明いたしますよう」

「はい、お願いします」

わたしの名前は、大山三津五郎といいます」
オオヤマミツゴロウ、かっこいいですね！」

もう二人は、仲良しになっているのに、圭介は感心していた。

「のぶ村は昔忍者が住んでいました。君は地元の子かい？ 知っているよね」

三津五郎さんは、圭介に聞いた。

「死んだじいちゃんから、そんなことを聞いたことはあるけれど、おれんち昔から農家やっていたみたいだし……」

「忍者は、農業をやって生活していたんだよ。戦争や城下からお呼びがかかると、出かけて行ったのさ」

「じゃあ、ふだんは農家で、なにかあると忍者に変身するんだ」

「すごい！」

エドが声を上げた。

「これは忍者の道具だ」

三津五郎さんは、ガラスケースを指差した。中には忍者が使用する、刀やふくめんなどが入っていた。それにエドは、いちいちさっきから大声を上げていたのだった。

三津五郎さんが刀を示した。

「忍者は、基本的に刀を使って戦うのは、得意ではなかったんだ」

「えー、そうなの？」

圭介は、それは意外だった。

「忍者は、チャンバラで相手を倒そうとは思っていないくて、ほかの戦術で戦ったのさ。刀はほとんど護身用だ。背中にしょっていて、邪魔にならないように普通の刀より短くなっている。高い塀をよじ登るのにも使っていた」

「おーん」

「大した、ものだね」

三津五郎さんの説明は続いた。マキビシや手裏剣などはしっているけれど、忍者の道具は数えきれないくらいあった。

それにとっても興味深かった。

「最初から最後まで興奮しているエドは、ずっと 忍者になりたい、忍者になりたい」と言い続けていた。

「では、明日から忍者の修行に來なさい」

三津五郎さんは言った。三津五郎さんは、忍者学校の先生で、忍者の修行を教えてくださいるそうだ。

エドは、嬉しくてたまらないと、三津五郎さんに抱き付いていた。

「エド君、忍者はそんなオーバーアクションをしては、敵につかまってしまうですよ」

三津五郎さんが言うのと、エドは急に「はい」と姿勢を正し直す立った。

「なかなかよろしい。圭介君も一緒に来るんだね？」

三津五郎さんが、圭介に聞くと

「い、いいえ。ぼくは結構です」

あわてて、ことわった。

「明日から、エドは忍者になるために三津五郎さんのところへ修行に行くことになった。」

圭介は、忍者になるつもりはなかったので、三津五郎さんの誘いはことわった。

「圭介、どうして修行しないの？ 忍者になりたくないの？」

エドは、圭介がどうして来ないのか不思議でしようがないようだった。

おれ、忍者になる必要ないもの」
忍者になったら、水の上を歩いたり、壁から消えたり、すごいことができるんだよ」
水の上は歩かなくなっちゃって、泳げばいいよ。姿を消す生活なんてしたくないし」
手裏剣投げたり、刀で戦ったり、かっこいいじゃないか」
大を切ったりしたら、大変だよ」

圭介がそこまで言うのと、エドは怒ったように
怒鳴りだした。
怒るなよ。忍者はすごいとは思いうけど、おれはそういう人がいるっていうだけでいいんだよ」

そうか、じゃあぼくは、忍者になる」

エドは決心したように言う。

そうしろよ。おれは休みの間、秘密基地を整理整頓するんだ」

「エミツ・・・？」

まあ、こいよ」

と、圭介は自転車を走らせた。エドは、お母ちゃんのママチャリに乗っている。なかなか乗り心地が良いそうだ。

神社に着いた。裏のたけやぶの方へまわる。真ん中あたりに草をかき分けると、ダンボールが現れた。それをとりのぞくと、一メートルぐらいの穴があった。

「ここだよ」

中に入る。洞穴のように中は大きくくりぬかれていて、圭介が立っても、天井ぎりぎり当たらないくらいになっていた。でもエドは背が高いので、頭がつかえてしまう。圭介は、中に置いてあった懐中電灯をつけた。古ぼけた椅子と小さな机、奥の方にタンスがあり、タンスの上には漫画の本が五冊置いてあった。

おお、シックレット・プレイス！」

エドが、興奮したように言った。

これはおれの秘密基地だ。友達の裕二と見つけたんだけど、あいつ、今ハワイに行ってる」

ハワイ。日本の方がずっといいのに」

エドはオーバーに目をむいた。

おれは、ここをりっぱな秘密基地にするんだ」

もう、なってるじゃないか」

だめだよ。もっと基地らしくするんだ」

「こは、もしかして、昔忍者が隠れていた穴なのか？」
ちがう」

圭介は、首を振った。

これは防空壕だ」

「……？」

エドが、わからないと首を傾げた。

戦争の時に、爆弾が落されても大丈夫なように、穴を掘って隠れたのさ。アメリカにはないのか？」

エドは、オーバーに肩をすくめた。

戦争は、悲しい出来事だ」

そうだな」

その時、ごそごそと何かが入ってきた。
なんだ！」

圭介が懐中電灯を向けた。犬が一匹しっぽを振って圭介を見上げていた。

「ハナ、びっくりさせるなよ」

圭介は、ハナの頭をなせた。

「圭介のペットか？」

「いや、ちがう。この境内に捨てられていたんだ。でも、みんなで育てた。こいつか
しこいんだ」

「かわいい犬だな」

エドは、ハナの顔をやさしくつつんだ。何かの気配があったのか、エドが入口に顔を
をくると向けた。

「だれかいるの？」

圭介は、出口に向かうと、誰かがすばやく逃げて行った。

「綾子！」

逃げていたのは、綾子だった。

綾子が止まった。ゆっくりと振り向いた。無口で自分から行動することのない綾子
が、何か言いたげだった。

「なんだよ？」

綾子はもじもじしている。

「だから、なんだよ！」

圭介が強い口調で言うと、綾子が小さな声でしゃべりだした。

「ハナ、いる？」

「いるよ」

圭介が「ほら」と基地の中をさした。

綾子はおそろおそろ、基地の中へ入っていった。

うすぐらい中で、エドがハナをずっとなせていた。

「ハナ」

綾子が声をかけると、ハナがしっぽを振って飛びついた。

「ハナは、綾子が好きみたいだ」

エドが言うと圭介が言った。

「すて犬だったハナを最初に見つけて、えさをあげていたのは、綾子だ。そのうちみ
んなで、かわいがった」

「みんなのペットか」
「そうだ」

綾子の家には、三郎じいちゃんが三匹も猫を飼っていたので、犬を飼うとは言い出
せなかったようだ。でも、みんながハナを可愛がっているの、ハナも幸せそうだ。

次の日エドは、朝から三津五郎さんのところへ出かけていった。

圭介は、秘密基地へ行く。今のところこれを知っているのは、圭介と裕二、エドと
綾子だけだった。そしてハナも知っていて、最近はこの基地に住み着いていた。

朝圭介が、秘密基地に行くと、境内のところで綾子がハナにえさを上げていた。

とにかく綾子は、ハナのそばにいるのが好きなようだ。

綾子、おまえ今日は、おれを手伝え」

圭介は偉そうに、綾子に言った。綾子は一瞬「えっ？」と言う顔になったけれど、
だまって圭介について行った。

ついて行った場所は、ゴミ捨て場だった。今日は粗大ごみの日で、いらなくなった
学習机や古い本箱なんかがすててあった。その中にコタツがあった。おそろくもう、
古くて使わなくなったものだろう、圭介はこたつの板の片方を綾子に持てと言い、ふ

たりに基地まで運んだ。その二人の後にハナがちよこちよこついてくる。

そこに捨ててあるもので、使えそうなもので、持っていけそうなものは全部運んだ。お部屋みたい」

綾子が嬉しそうに言った。

「この基地を、もっと快適にするんだ」

カイテキキにして、どうするの？」

綾子が聞く。

「ここは秘密基地だぞ」

圭介の言葉に、綾子がコクンとうなづく。

「この基地は、宇宙と交信する場所なのさ」

これは口から出まかせだった。本当はただ、この基地にガラクタを集めて楽しいだけだった。何のためにと言われると、何もなかった。ただ、面白いから」では、理由としてつまらないと思った。

午後になるとエドが自転車で帰ってきた。エドは、ママチャリから降りると、

圭介、ぼくは忍者の名前をもらったぞ」

ものすごく興奮しながら言った。

忍者の名前？　じゃあもう忍者になったの」

するとエドは、首を横に振った。

「いや、まだだよ。修行中だよ。三津五郎さんの弟子になったから、名前をもらったんだ」

ふうん、なんていうの？」

「エドざえもん」

う、ぶっ」

思わず圭介は吹き出した。

ポクえもん、みたいじゃないか」

でもエドは、平気な顔だ。

だからいいんだよ。最高の名前だよ」

「エドざえもん」

綾子が声に出していった。

綾子、いい名前だろう？」

エドは、とても気に入っているようだった。

綾子が　うん」とうなづく。

よし、今度からエドざえもんって、呼ぶことにするよ」

圭介の言葉にエドざえもんは、満足そうにうなづいていた。

圭介は、ほとんど基地の中か境内で遊んでいた。そのそばには、いつもハナの世話をしている綾子がそばにいた。エドざえもんは、午前中は忍者の修行で、午後になったら圭介のところへやってきた。エドざえもんは、基地に置いてある漫画を読んでは、日本語の勉強をしていた。

エドざえもんは、日本語が読めるなんて偉いな。おれは英語はエイ、ビー、ーシーしか、知らないぞ」

ぼくは、忍者なんだから日本語が読めないとだめだろう？」

なるほど」

でもなあ」

とエドざえもんが、言った。

ぼくは三津五郎さんに言ったんだ。三津五郎さん、ぼくは本物の忍者に出会えてと

でも幸せです。って」

うん」

そうしたら三津五郎さんが、実は、わたしは忍者の子孫のところへ婿養子に来たから、正確に言うると子孫ではないと、言った。婿養子ってなんだ？」

えーと、忍者の家の人じゃなくて、よそから来た人だよ」
うまく説明できない。

本物の忍者じゃない、ってことか」

エドざえもんは、ちよつとがっかりしているようだったけれど、何かを思い出したように言った。

本物の忍者は、忍者であることをかくしていて、普通に生活しているんだって」

誰だか、わかっていないんなら、誰でもいいよ」

なにいつてんだよ。圭介は日本人だろう？ 忍者の伝統を受け継がないなんてもつたいないとは思わないのかい？ 忍者は優秀な人間なんだよ」

エドざえもんは、むきになっていた。

だから三津五郎さんがいるんだろう」

う、うん。でもぼくは、いつか普通に生活している忍者を見つけ出したい」

そんなのいるかなーと、圭介は思ったけれど、面倒くさくなつたのでやめた。

エドざえもんは、忍者の話を熱っぽく語り、圭介は基地で、王様みたいにふんぞり返っていた。また、綾子は一日中、ハナと遊んでいた。

そのあと、境内の中で、圭介とエドざえもんは、キャッチボールをする。エドざえもんはキャッチボールがうまかつた。

取り落としてはずんでいったボールをハナが追いかけてたりする。綾子がうれしそうにそれを見ていた。

綾子、自転車あるか？」

圭介が聞くと、綾子は暗い顔で首を横に振つた。

綾子は、三郎じいちゃんと二人暮らしだからなのか、えんりよがあるようだった。

そうか、じいちゃんに聞いてみよう」

圭介は、綾子の気持ちを聞くでもなく、さっさと自転車を押して歩き出した。
どうするの？ とあわてたように綾子が走り出して圭介の前に来た。

心配すんなよ。三郎じいちゃんに聞くだけだよ。古い自転車でもいいだろう」

自転車で行動するのか？」

エドざえもんが、口をはさんだ。

どこにでも、行けるだろう？」

圭介は、ジロリとエドざえもんを見た。

エドざえもんは、忍者になるんなら自転車はいらないな。本物の忍者は乗ってなかつたぞ」

一瞬、エドざえもんが困つたような顔をした。でもすぐに明るい顔になって言った。

三津五郎さんは、車に乗っていた。だから今の忍者は、移動手段として乗り物を使うのさ」

圭介は、ふふんと笑う。

三郎じいちゃんに、綾子が使ええる自転車があるか聞いた。

自転車か、じいちゃんが使っているのしかないな。ちよつと待ってよ」

じいちゃんは、となりの家へ行った。戻ってくると、子供用の自転車を転がしてきた。男の子用で黒い自転車だ。

ちよつと借りて来たよ。これに乗ってごらん」

じいちゃんは、綾子に渡した。綾子は、もじもじしながらハンドルを握る。

「いいね」

エドざえもんが言う。

よし、行こう」

じいちゃんが、嬉しそうにみんなの姿を見送っていた。

圭介は、思いっきり自転車をこぐ。ぐんぐん進む。あの例の落ちたでっぱり坂に来た。ここは気を付けなければならぬところだ。ここで自転車を止めて二人に注意しなければと振り返った。後ろからエドざえもんが来て、やっと圭介のとなりで止まった。

あれ、綾子は？」

わからないと、エドざえもんが、肩をすくめた。

いつまでたっても、綾子は来なかった。ハナも来ていない。ハナは、綾子にいつもくっついていいるから、来ないのだろう。

どうしたんだ？」

圭介とエドざえもんが、顔を見合わず。

おれ、ちょっと見てくる」

圭介は、来た道を戻っていった。

先の方に自転車を押して歩いて歩いている綾子がいた。その横にハナが守るように歩いていた。

なんで乗らないんだよ」

圭介が言うと、綾子は泣きそうな顔をした。

わたし、乗れないの」

圭介は思わず、ずっこけそうになった。

どうして言わないんだよ。わざわざ三郎じいちゃん借りて来たんだぞ」

だって、だって」

綾子が泣き出した。

じよーがねえな。よし、綾子、ここで待ってろ」

圭介は自転車をこいで、エドざえもんのところまで行った。

今日は、綾子の修行の日にする」

わ？」

エドざえもんが、顔をしかめた。

綾子は、自転車が乗れないんだ。だから乗れるように練習する」

場所は小学校のグラウンドだ。

休み中は、誰もいない。

「いか、おれはお前の補助はしないぞ。自分で練習するんだ。やり方だけおしえてやるよ」

こうやって、サドルに乗って、ペダルをゆっくり踏むと前に行くんだ」

綾子がやってみるけれど、踏み出す前に自転車が倒れてしまう。

ほら、レッツゴー！」

エドざえもんが、綾子が乗っている自転車の後ろを支えて押してくれた。自転車はふらふらと少し走ったかと思うと、すぐに倒れた。何度もするけれど、なかなか乗れない。

あいつ、かなり運動神経悪いな」

圭介はななかばあきれかえって、眺めていた。

それにしても、エドざえもんは、よく綾子に付き合っていた。転ぶたびに ファイ

トファイト！」
と励ます。

「これは、無理だな」

圭介は、あきらめていた。そして立ち上がると、大声で言った。
「エドざえもん、おれは帰る。どうする？」

「エドざえもんと綾子が、えっ？」と言う顔をする。

綾子、自転車に乗れないと、おれらの仲間には入れないぞ！」

そう言い残し、圭介は、さっさと自転車をこいだ。

しばらく行くと、後ろからエドざえもんが付いてくるのが分かった。

「あんなことして、いいのか？」

「エドざえもんが、心配そうに聞いてきた。」

「あれだけ付き合っても、乗れないのならもう、無理だよ」

圭介は、自転車の練習は、二時間ぐらいで乗れるようになった。しかも最初から、ふらふらはしていたけれど、前に進んでいた。綾子は、自転車に乗ることさえできなかった。

これで綾子が泣こうが、がっかりしようが、仕方ないことだ。

「こだよ！」

圭介は、手を横に伸ばしてエドざえもんをさえぎった。

この坂を自転車ですり降りると、とても気持ちがいいところだ。でもこの先は、でっばり坂になってるので、気を付けないと田んぼに飛び込む、きけんな場所だ。

圭介が、突っ込んだところだ」

確かに、その時のことがきっかけで、エドざえもと出会った。だけど言われるとちょっとイラッとくる。

「いやな言い方するな」

圭介がギリギリとらんだ。エドざえもんは、笑いをこらえながら首を振った。

「こは、みんな落ちるんだよ！ だから気を付けるよ！」

「破れかぶれに言う圭介に、エドざえもんが、

「わかった、わかった」

と、手を上げた。

「そうか、じゃあいくぞ！」

圭介が気合を入れて出発しようとした時だった。後ろからさけび声が出た。

「圭介くーん！」

綾子だった。ふらふらしながら自転車に乗っていた。でも、顔は恐怖で引きつっている。

「乗れるようになったのか」

圭介が喜ぶのは早かった。綾子は圭介を素早くスイと通り過ぎていった。

「とまんない。どうするの？」

綾子が叫ぶ。

「おい、ブレーキを握れよ！」

遅かった。綾子は猛スピードで坂を滑り降りていく。

「大変だ！」

圭介は追いかけた。

「綾子、手だよ。手、握れよ！」

「ヤァー！」

綾子の耳には圭介の言葉は、入ってこない。ただただ、叫ぶだけだ。でっばり坂だ！

「ああー！」

ポーンと綾子が空を飛んだ。

ドサッと綾子が田んぼに落ちた。

綾子、だいじょうぶか？」

圭介は、急いで自転車を止めて、綾子が突っ込んだ田んぼへザブザと入った。

綾子は、あおむけで伸びていた。

「おい！」

綾子を起こす。

からだのどこか、痛いか！」

綾子は、目を開いた。

「背中が痛い」

顔をしかめた。

「立てるか？」

「うん」

綾子が、ゆっくり立った。骨は折れていないようだった。

圭介は綾子に肩をかしながら、歩いて行った。

道の上には、エドざえもんが自転車を上げていた。

「自転車壊れているよ」

「ええー、どうしようー」

綾子が泣きそうな顔で言った。

綾子は、体全体を打っていて、特に背中が痛いと言っていたけれど、圭介と同じようにそんなにひどいけがもなく、「安心だった」

田んぼは、このあいだお母ちゃんが、苗を新しいのと植え替えたばかりのところだった。同じ場所に孫の綾子が落ち込んでしまった。

綾子は、三郎じいちゃんのところへ行くのにかなり尻込みしていたけれど、圭介とエドざえもんが一緒に行き、あやまってやるよと言ったら、やっとしぶしぶ歩き出した。

「三郎じいちゃんは、ものすごくやさしいぞ。綾子、なんでそうなんだ？」

「だって、悪いもん」

綾子が小さな声で言った。

「おれなんか、もっともつと悪いことしてるぞ。怒られるけどな」

「蔵にいれられる」

エドざえもんが言った。

「うるさい！」

三郎じいちゃんは、綾子が泥だらけになっているのを見て、とても驚いたけれど、圭介が事情を話すと

「おう、おう、そうだったか」

顔じゅうで笑っていた。

おとなしい綾子が、やんちゃをやったことが、とても嬉しいようだった。

その後綾子は、三郎じいちゃんにピンク色の新しい自転車を買ってもらった。

それからは、圭介、エドざえもん、綾子、ハナの三人と一匹で行動するようになった。

圭介は、いつものように基地にいた。

いつもは、綾子が必ず来ているはずなのに、全然こない。もしかして昨日でっぱり坂で、飛んでぶつけたところが痛くなって、動けなくなったのだろうか、気になった。

エドざえもんは、忍者の修行にいつているから、帰ってくるのはいつも午後だった。ちよっと気になったので、三郎じいちゃんの家に行くことにした。

境内を出ようとすると、綾子が血相変えて走りこんできた。なんだ元氣じゃないかとほっとした。

圭介くん、ハナ知らない？ 朝ここに来たらハナがいないの」

ハナはいろんなところで、寝たりするけれど、最近は、境内に寝泊まりしていた。綾子は毎朝ここにやってきて、ハナにえさをやっていた。

そういえば、今日はいないな」

学校まで行ってみたんだけど、いなかった」

ハナは、学校が始まるとみんなについて行って、学校の校庭で寝そべっていた。

自転車に乗れるようになった綾子は、学校まで行ってきたらしい。学校のどこかすみっこにでもいるかと、くまなく探したようだった。

でもないなかった。

昼になるとエドざえもんが、修行から帰ってきた。

圭介、今日せっしやは、手裏剣を投げたぞ。パンパンって」

エドざえもんが、手裏剣を投げる動作をした。

おうん」

圭介の気のない返事と、綾子の沈んだ顔を見て、のうてんきなエドざえもんもどうかしたの？」

と聞いてきた。

ハナが行方不明なんだ」

ハナが？」

エドざえもんが、キョロキョロと見回す。いつもは、綾子のそばにいるはずのハナが、いない。

うーん」

と、考える。

圭介、ここに来るとき、だれかが言っていたぞ。ホケンジヨの車が来たって」

ホケンジヨ？」

犬を捕まえるって」

えっ？ だれがいったの？」

さあ？」

どこで聞いたの？ そこに行こう」

圭介は、エドざえもんをせかして、自転車に乗った。

その場所は、神社に来る途中の道で、両脇は全部畑や田んぼだ。

その近くで、畑をやっている近所のおばちゃんがいたので、圭介は声をかけた。

おばちゃん、ここにホケンジヨが来たの？」

おばちゃんは、手を止めて圭介を見た。

ホケンジヨ？ ……ああ、保健所ね。保健所の車がね、犬を乗せて走っていったよ」

圭介はギクリとする。

ハナが乗っていた？」

そんなの見えないよ。ハナ、いないのかい？」

うん」

そう、もしかしたら、捕まってしまったのかもしれないね」

おばちゃん、その車今どこか知らない？」

さあ、わからないよ」

おばちゃんは、首をかしげる。そして
もう、保健所に帰ったんじゃないかね」

おばちゃん、ありがとう」

保健所の場所は知っていた。町はずれだ。自転車で行くには遠すぎるところだ。

圭介は、ぐんぐん自転車をこぎだした。

圭介の家に向かってはいる。一体どういうことかわからないまま、エドぎえもと綾子は、後について行った。

自分の家を通り過ぎ、道を進む。そしてやっと止まった。

おかあちやーん！」

圭介は、畑に向かって呼びかけた。そこにはお母ちゃんを入れて五人、農作業をしていた。今は、春野菜のキャベツやアスパラの収穫に忙しい。

あいよー！」

圭介のお母ちゃんが、顔を上げて返事をした。

お母ちゃん、頼みがあるんだ」

お母ちゃんは汗を拭きながら圭介のところへやってきた。

なんだい？」

お母ちゃん、ハナが保健所へ連れていかれた」

さっき車を見かけたけど、そうなの？」

おかあちゃんは、眉間にしわを寄せた。

きつそう。だって、ハナがどこにもいないもん」

綾子が泣きそうな顔で言った。

そうかい」

お母ちゃんは、かぶっていた麦わら帽子をらんぼうに取ると、速足で車へ向かった。

車は農作業用の軽トラックだ。

軽トラには、運転手以外二人しか乗れない。圭介は綾子に言った。

綾子、もしかしたらハナが帰ってくるかもしれないから、お前はここで待ってる」

綾子は、力が抜けたように、へなへなとそこへ座り込みながら、小さく残念そうにうなずいた。

綾ちゃん、おばちゃんが必ず連れてくるからね」

力強い言葉に、綾子はもう一度大きくうなずいた。

乗りな」

お母ちゃんの言葉に、圭介とエドぎえもんが、さっと乗った。

まったく、余計な事をする人がいるもんだね」

運転しながら、お母ちゃんは怒っていた。

野良犬のハナが、毎日学校にいないことや、宿無しのハナがここらへんをうろろしていることが、とても気にいらぬ人がいるのはわかっていた。

でも、まさか保健所へ電話をかけてくるとは、あまりにもひどいと思った。

保健所は、車で十分ぐらいで着いた。

圭介とエドぎえもんは、着くとすぐに車を降り、駆け足で建物の中へ入っていった。

受付の人に、

犬を引き取りに来ました」

と言うと、場所を教えてもらった。

奥の方に行くくと、たくさんの犬の鳴き声が聞こえて来た。ここだと圭介は急いで建物の中へ入っていくと、捕獲した犬の詰所のようなところがあって、そこのおじさんに、

「恐町で、捕まえた犬をもらいに来ました」

息せき切って言った。おじさんは頭のはげた、きむずかしそうな人だ。

「ああ、さっき来た犬かな？」

おじさんは、ギロリとにらんで聞いた。

「はい！」

圭介は、力強く答えた。

「あれは、君の犬？」

「はい、あつ、みんなの犬です！」

みんなの？ ……電話があったんだよ。野良犬が町中をウロウロしているって。い

つ人をかむかわからないから、危険だって」

「ハナは、おとなしい犬です！」

圭介は必死で言った。

でもね、首輪がないし、予防注射もしていないんだろう？ 狂犬病になったどうするの？」

「そんなのおかしいです」

いきなりエドざえもんが話し出した。エドざえもんが外国人だったので、おじさんが驚いて目をむいた。

「ハナは、ぼくらの犬です。みんなで育てているのに、どうして捕まえるのですか。本当のことを知らないのに、電話した人がうそを言っているかもしれないのに」

エドざえもんが、興奮してきた。

「君たち、待ちなさい！」

うるさそうにおじさんが、怒鳴りだした。

「君たちのような子供じゃダメなんだよ。大人がいなくちゃ。もう、帰りなさい」

おじさんは追い払うように手をしっしとする。

「大人はいますよ！」

お母ちゃんが、後ろからゆっくり歩いてきた。そしておじさんの顔を真正面から見つめ、はっきり言った。

「さっき、捕まえた雑種の犬なんですけど、引き取りに来ました」

おじさんは、突然現れたお母ちゃんに面食らった顔をしていたけれど、すぐに気を取り直して言った。

「この子らは、みんなの犬だと言っていましたけど、みんなの犬ということは、持ち主がないわけです、それは野良犬とみなします」

「みんなの犬と言うのは、みんな可愛がっているということですよ。あの犬は、うちの犬です」

お母ちゃんが言い放った。

「しかし首輪がないです」

「首輪はいらない。ハナは自由だから」

エドざえもんが、口をはさんだ。でもすぐにお母ちゃんが言う。

「付けます」

おじさんは、顔をしかめた。

「おたくの犬なら、予防注射はしたんですか？」

「すぐします」

お母ちゃんは、澄まして答えた。

「むかし、おたくの犬だという確信が」

おじさんは、しぶとくぶちぶちと言いだしたので、お母ちゃんはキレてしまった。あなたは何を言っているのですか、どうやって持ち主だというしよこを出すんですか。犬がしゃべれるわけじゃないでしょう。あなたたちがうちの犬を勝手に連れて行ったんですよ。うちの所有物が、盗まれたと警察に言ってもいいんですよ」

おじさんは、とうとうお母ちゃんの迫力に押された。

矢しぶりに、スカッとしたね」

帰りの車の中で、お母ちゃんは上機嫌だった。

ハナは嬉しそうに、しっぽがちぎれるくらいにふっていた。

お母ちゃんは、侍みたいに強かったです。いや、忍者です。もしかしてクノイチですか？」

エドざえもんが、感心しながら言った。

「ははは、わたしのご先祖様は、くノ一だったのかもしれないわね」

くノ一ってなに？」

圭介が聞く。
クノイチは、女の忍者です。お母ちゃんは強いですからクノイチです。すごくかっこいいです」

エドざえもんは、お母ちゃんにぞっこんだった。

お母ちゃん、ハナはうちの犬になるの？」

圭介が聞く。

また、連れていかれちゃうと嫌だからね。首輪をすぐ買わなきゃ」

でも、お父ちゃん、メスはだめだって、前、言っていたよ」

お父ちゃんは、メスは子供をじゃんじゃん生むから駄目だといっていた。

そよなのよねー」

お母ちゃんは、困り顔だ。お母ちゃんは強いけど、お父ちゃんは、それに輪をかけてがんこものだ。幼稚園の時に蔵にいれられたのを思い出すと、恐ろしくて震えがくる。

クノイチが、お父ちゃんに負けるはずがない」

エドざえもんは、なぜか余裕がある。

圭介は、「うーん」と考え込んでしまった。

ハナは、うちで飼うことになったから、もう、保健所に捕まることはないよ」

お母ちゃんは、綾子に言った。そして、

綾ちゃんは、いつでもハナに会いに来ていいんだよ」

というと、綾子はにっこり笑った。綾子は本当にうれしそうだ。

さて、問題はお父ちゃんだ。お母ちゃんはどうするのだろうか、圭介は心配だった。

夜、お父ちゃんが帰ってきた。

お父ちゃんは、知り合いの家へ行ってた。

林さんところの山から、タケノコが消えているらしい」

林さんの山は、竹林で春になるとタケノコがたくさん採れる。

どういうこと？」

お母ちゃんが聞く。

朝に、タケノコを掘りに行ったら、どうも誰かに掘られているらしいんだ」

泥棒してるってこと？ いやだねえ」

お母ちゃんは、お父ちゃんの好物の焼き鳥を用意していた。

エドざえもんは、「ヤキトリ！」と、食らいつく。そしてうまいうまいと、何度も言った。

お父ちゃんも急に上機嫌になり、焼き鳥とビールを飲みだした。

お母ちゃんが何気なく切り出した。

お父ちゃん、いつも家に来るかしい野良犬がいるんだよ。その子が保健所に捕まってしまうってね、かわいそうだからウチが引き取ることにしたよ」

ああ、学校についていく犬か？」

お父ちゃんもハナの事は、知っていた。

ただどの犬は、メスじゃなかったか？」

「瞬圭介は、どきりとした。でもお母ちゃんは、すぐに

ちがう、ちがう、男の子だよ」

と、言った。

オスだよオス」

圭介も言った。

オスです」

エドざえもんも、澄ましていった。

そうか、オスだったか。それならいいだろう」

圭介は心の中で、ガッツポーズをしていた。

お母ちゃんとエドざえもんは、にんまり笑っていた。

名前はなんていうんだ？」

お父ちゃんが圭介に聞いたので、圭介はあわてた。

「ハ、ハ、ナ」

お父ちゃんが、眉間にしわを寄せて圭介を見つめる。

「ハナオっていうんだよ」

とっさにお母ちゃんが言った。

「ハナオ？ ……ゲタみたいな名前だな。ははは」

お父ちゃんは大口開けて笑い出した。お母ちゃんも付き合っって笑いだした。

圭介は、笑えなかった。お母ちゃんは、度胸がある。やっぱりくノ一なのかもしれないと思った。

ないと思った。

ハナはすぐに、新しい首輪を買ってもらって、圭介の庭の犬小屋で寝るようになった。そのほかは、前と同じで変わらない。つながれることもなく、自由に歩き回っていた。もうノラ犬ではなく、圭介のウチのペットだ。

保健所に連れていかれることはない。……と、おもうのだが、少し心配ではある。

だけど、そんなことがあったら、くノ一お母ちゃんが連れ戻してくれるから大丈夫だ。

それからエドざえもんは、お母ちゃんのことを

「カノイチ様」

と呼んだら、それだけはやめてほしいとお母ちゃんに強く言われたので、

「ママ様」

にした。

やっぱり、それも嫌だと言ったけど、

「これだけはあとにひけませぬ」

エドざえもんは、聞かなかった。

その日の夕方、お母ちゃんが畑から帰ってきた。なんだかもうひとつ、浮かない顔をしている。どうかしたの？」

圭介が聞いた。

「うーん、どうもね……」

お母ちゃんは、考え込んでいた。

最近、あちこちで色々な作物が盗まれているんだよ。ウチも今日、キャベツと新じゃがをこっそりとられちゃったよ」

えっ、どろぼう？」

私らが、たんせい込めて作った作物を、盗むなんて最低だよ」

お母ちゃんは、腹立たしさが収まらない。

あの作物は、私らにとっちゃ、子どもと一緒になんだ。毎日成長を楽しみにしているんだよ」

お母ちゃんの怒りは収まらなかった。

おれもキャベツと一緒にか？」

そうだよ。キャベツはかわいくて食べちゃうけど、圭介は食べられない。それだけだよ」

圭介は、ほっぺたをふくらました。

けいさつには、言ったの？」

圭介が聞く。

みんな言っているんだけど、つかまらないんだよ。よっぽどずるがしこい奴なんだね」

盗まれたのは、野菜や果物、そして倉庫に入っている米まで盗まれた。

これは深刻な問題だった。盗まれた畑の持ち主は、交代で夜回りをしたりしているけれど、なかなか捕まえられなかった。

そんな騒動の中、圭介はひとりで神社へ行った。

そこにはもう、ハナが来ていて、境内に寝そべっていた。

「ハナ、もう来ていたのか。お前はいつも早いな」

ハナの頭をなざると、基地へ向かった。

入口をふさいでいた、ダンボールが外れてころがっていた。誰かが来たんだろうかと、中に入って懐中電灯で照らしてみた。

そこにハナがやってきて、洞窟の中をくんと臭いをかぎだした。

誰かが入ったような気がする。

ガサッと入口で音がした。どきりとして振り向くと

「ハナ」

呼びかけながら、綾子が入ってきた。

綾子、おれが来る前に、ここに入ったか？」

綾子は「はいや」と首を振る。綾子はひとりの時は、絶対に洞窟へは勝手に入ったりはしないのはわかっていた。

なんか変だな」

圭介は、洞窟中を隅々まで照らして調べた。

漫画の本が、開きっぱなしになって置いてある。やっぱり誰かが動かしただ。どうしたの？」

綾子が聞くと同時に、圭介が

わっ！」

と声を上げた。何かを踏んだらしい。
何か果物のようだ。圭介が踏んだので、びちゃんとひしゃげている。踏んだものをよく見て見る。ビワだった。

やっぱり誰かが入って、ここでビワを食べたのだ。
どろぼう？」

綾子が声を潜めて聞いた。
どろぼうかもしれない」

えー」

綾子も、どろぼうの事は知っていた。

「へーい、圭介、やっぱりここにいましたね」

いきなりエドざえもんが現れたので、二人とも心臓が止まるほど驚いた。
しかもものんきに、くちやくちやと何か食べていた。ビワだ！

エドざえもん、それどうした！」

圭介は、エドざえもんをにらみつけた。エドざえもんは、圭介と綾子の怖い顔に、あたふたとしていた。

「オー、こわーい。ホワイ？」

そのビワどうした？」

さっき、ママ様に会ったので、もらった」

「ここで食べたことあるか？」

「いや、ここには来ていない」

エドざえもんは、両手を上げて答える。

「ビワがここに落ちてるんだ。エドざえもんか？」

「アーノーちがうよ。そんなことはしていない。神に誓ってもいいよ。いや、忍者にかけるよ」

エドざえもんは、オーバーに十字を切ったり、忍者っぽく空手の構えをしたりした。

エドざえもんではないらしい。とすると、誰かがここに来たというわけだ。気持ちが悪い。

ハナは、くんくんと落ちていているビワのにおいをかいでいた。

「ハナ、食べちゃんだメだよ」

圭介はハナを引っ張った。

誰か知らないやつが、ここで勝手におれの漫画を読んで、ビワを食べて散らかしていった」

勝手に入るのは、よくないことだ」

うんうんとエドざえもんがうなづく。

おれでも、綾子でもエドざえもんでもないとする、そいつは侵入者だ」
ちよっと、入ってみただけかもしれない」

エドざえもんが言う。

「ここは、おれたちの秘密基地だ」

圭介は、声を荒げて言った。

でも、みんな知っているよ」

エドざえもんは、頭に来ることを言う。

だからって、入るのはルール違反だ！」

そんなに怒るなよ。ぼくも圭介の許しがないと、ここへは入らないよ」
当たり前だ」

圭介は、鼻息が荒い。

帰ってから、お母ちゃんに基地にだれか侵入したこと、食べかけのビワが落ちていたので、どろぼうかもしれないと報告した。

まだはっきりしたことは分からないね。もしかして、ほかの子供達かもしれないしやっていることが、子供っぽいからね」

たしかに子供っぽい。
だとしたら、だれだ？ 同じ学校の子か？ うーん？」と頭をひねる。ちっとも浮かんでこない。疲れるので圭介は考えるのをやめた。

また、だれかが基地に来たら、どうしよう？」

圭介が、エドぎえもんに言った。

そんなもん、ぶっとばせ！」

だけど、おれより大きな奴だったら、やばいな」

ぼくにまかせろ」

エドぎえもんが胸を張る。そして

ぼくは、忍者だ」

と言った。

そうか、たのむぞ」

とは言ったものの、ヒョロヒョロのエドぎえもんが、強いとは思えなかった。

次の日、またどろぼうが出た。

圭介の近所のビニールハウスから、メロンが、朝になるとごっそりなくなっていた。はさみできれいに切っているので、畑の作業に慣れている奴だろうとみんなが言っていた。

盗まれたのは夜で、しかも十分ぐらいの短い時間でやっってしまうらしい。けいさつも、近所の人たちも、悪知恵のある常習犯だろうと言っていた。

そして、基地の中も荒らされた。

荒らされたといっても、基地の中の漫画を読んでは、片付けもしないで読み散らかしたままで、またビワを食べたさんがいがすてであった。

おれらが、帰った後に入っている」

圭介は、探偵のように一つ一つ調べる。

夜だ。ぼくたちが寝ている間に来たんだよ」

エドぎえもんも、一緒になって推理する。

その横で綾子が、ハナの頭をなぜながら、ふたりを真剣な顔で見ている。

ハナは、基地の中をクンクンと嗅ぎまわっていた。いつもと違う臭いがするのだから。

夜、ここで見張っていたらいんだ」

エドぎえもんが言う。

そうだけど、夜のここは、結構怖いぞ」

ダイジョーブさ」

エドぎえもんが、肩をすくめながら言った。圭介には、そうとも思えなかった。

家に帰って、夜に基地の前で見張ることを言ったら、お母ちゃんとお父ちゃんに、猛反対された。

特にお父ちゃんから、叱られた。

そんなことは、子どものすることではない」

ぼくは忍者で強いです。だからダイジョーブです」

エドぎえもんが、言ったら、

いくら忍者でも、君は子供だ。君がこの家に泊まっているかぎり、私は君の行動を

管理する責任がある。だから許すわけにはいかん」
お父ちゃんから強く言われ、エドざえもんはあきらめた。

夜寝るときに、エドざえもんが言った。
明日で、ぼくの忍者の修行が終了する。いよいよ本当の忍者になれる日が来た」
早いな。忍者って案外簡単になれるんだな」
なにいつてんだ。修行は大変だった。ぼくは最短コースでやったんだ」
忍者になるのに、コースがあるのか？」
ぼくは、忙しいからな」
おーん」

それで圭介、明日、ぼくのハレスガタを見てほしい」
えー？」

ということで、今日圭介は、エドざえもんと一緒に出掛けることになってしまった。
あまり気が進まなかったけど、付き合いだと思っただけで行った。

エドざえもんが、なぜ、ここまで夢中になれるかよくわからなかった。

ハナが機嫌よくついてくる。

エドざえもんと一緒に自転車を走らしている途中、向こうから来た自転車とぶつか
りそうになって、あわててブレーキをかけた。

そのはずみで、相手の自転車の前かごに入れていた、紙がばらばらと地面に散らば
った。乗っていたのは圭介のお父ちゃんぐらいのおじさんだった。

ハナが、おじさんに近寄り、くんくんと夢中になって臭いを嗅いだ。そして、う
ー」と唸りだす。

だめだよ、ハナ」

圭介は、あわててハナをおさえた。エドざえもんは、急いで散らばった紙を拾って
おじさんに渡した。

「いやいや、ごめん、ごめん」

おじさんは受け取ると、そそくさと自転車を走らせて行ってしまった。

あまりにも、素早い行動だった。ハナが「ワンワン」とおじさんに向かって吠えた。

ハナが吠えるなんて、とても珍しいことだった。

あのおじさん、よそ見ばかりして、ちゃんと前を見ていなかったよな」
うん」

おじさんは、周りの景色ばかりに気を取られて、圭介たちを見ていなかったの
で、ぶつかってしまったのだ。

あれ？」

さっき拾った紙が、一枚だけ残っていた。

家の塗装いたしません』と書いてある。チラシだ。

「こら辺の家は、昔からの木造の家だから、塗装なんてするかな？」

おかしいな場違いなチラシだ。

途中、綾子のところに寄った。エドざえもんと出かけるので、ハナをよろしくと、
頼んだ。

一応 「一緒に来るか？」と誘ったけど、行かない」とすぐ断られた。

エドざえもんの修行は、なかなか面白かった。

床の間に飾ってある掛け軸の裏が、すっぽり穴が開いていて、そこに入って隠れて
ドロシしたり。床の木が組木みたいになって、外れて床下に入って隠れたり色々な仕

掛けがあった。

敵に追いかけられたときは、マキビシという、小さな栗のイガイガみたいのを地面にまくと、追いかけた人がそれを踏んで、「ててて・・・」となる。でも、今はみんな底が厚い靴をはいているので、あまり効果がないだろうなと圭介は思った。

最後は手裏剣だ。立てかけてある板に投げた手裏剣が五個刺さったらしいらしい。なんだかんたんで、漫画を見ているようで楽しめた。

そしてエドざえもんは、終了証書をもたらした。

その後三津五郎さんに、終了祝いにエドざえもんと圭介は、そろってラーメンを「ちそうしてもらった。

なかなか面白かったよ。おめでとう」

自転車で帰りながら、圭介が言った。

ありがとう。これで免許皆伝だ」

エドざえもんは、嬉しくてしようがないようだ。

神社に行くときと綾子がハナと一緒にいた。圭介とエドざえもんが、面白おかしく忍者修行の様子を話すと、綾子は楽しそうに笑っていた。

そんなことをしているうちに、夕方になっていた。

境内から出て、みんなで自転車に乗ろうとした。圭介は、あれ？」と目の前のビニールハウスを見た。

神社を出たところは、ビニールハウスが広がっている。ここはメロンを作っていた。もうすぐ収穫時期だと、圭介は知っていた。

その前に、男の人が立っていた。朝出かけるときに、うっかりぶつかったおじさんだったのだ。まだ、こんなところにいるとは。自転車の籠の中のチラシは、そのままだ。じっと畑を眺めるおじさんはあやしかった。

ワンワンワン！」

ハナが、その人に向かって、いきりたって吠えだした。

おじさんはびくりとして、飛ぶようにその場から自転車を走らせた。

あやしいな」

うん、あやしい」

圭介とエドざえもんは、顔を見合わせて、うなずき合った。

圭介は、おじさんの事をお母ちゃんに話した。

お母ちゃんは、さっそく畑の持ち主に連絡した。

次の日、メロンどろぼうが捕まった。

やっぱりあのおじさんだった。農園の持ち主は、お母ちゃんからの連絡が来たので、夜通し、家族五人で見張っていたらしい。

夜中の三時ごろに、犯人がやってきてメロンを素早くはさみで切っていた。十個ほど採ると、自分が乗ってきたワゴン車の中に積み込んだところを、捕まえられたらしい。メロンは全部一度食べごろのものだった。

となりの県からわざわざ盗みに来ていたようだった。盗んだものは、市場へ卸して売りさばいていたという。

ハナは、かしこいな。きつと犯人だと分かったんだよ」

圭介が、感心したように言った。

うん、忍者犬だ」

エドざえもんは、満足げにうなずいた。

ハナ、偉かったね」
綾子は、何度もハナの頭をなでていた。

次の日、メロン園のおじさんとおばさんが、圭介の家にお礼を言いに来てきた。本当に、よく連絡してくれました。おかげで被害がなくて済みましたよ。ありがとうございます」

「ここにいる子供たちが、教えてくれたんですよ」

お母ちゃんはニコニコ顔で、庭で遊んでいる圭介たち三人を紹介した。

圭介がおじさんに言った。

おじさん、ハナが一番最初にあの人が怪しいって、吠えたんだよ」

ちがう、ちがう、ハナオだよハナオ」

お母ちゃんが、あわてて言い直す。

その犬のことだね、賢いんだね」

おじさんは、感心したようにうなずいた。

ハナオは、忍者犬です」

エドざえもんが、得意げに手を振り上げる。

さあ、基地へ行こう」

圭介が言うと、エドざえもんが元気よく

おー！」

と返事をした。

三人そろって自転車に乗って出発。ハナも一緒に走りだした。

その後おじさんとおばさんは、のしのついた箱をお母ちゃんに渡しながら

「このあいだ、街でちよっとしたお菓子を見つけました。たしかここのおじいちゃんが、とても好きだったと、ウチのじいさんからきました。よろしかったらお召し上がりください」

と言って帰っていった。

お母ちゃんが箱の中を開けてみると、大きなビンがふたつ入っていた。中には色とりどりのコンペイトウが、入っていた。

「そういえば亡くなったおじいちゃんは、コンペイトウが大好きだったな」と思い出した。

「さっそくコンペイトウを、おじいちゃんの仏壇にお供えしようとお母ちゃんは、一ビン手に持った。仏壇は、おじいちゃんの部屋にある。今は、エドざえもんが使っていた。」

「おじいちゃんの仏壇に、毎日お参りをするので、部屋には入ります」とエドざえもんには了解してもらっている。

「おじいちゃん、いつもありがとうございます。泥棒が捕まりました」

仏壇にコンペイトウのビンを置き、お母ちゃんは手を合わせた。

圭介たち三人が、家に帰ってくると、お母ちゃんは、待つてまじとばかりに話し出した。おじさんとおばさんが、どんな風にどろぼうを捕まえたかを詳しく話していたらしい。

「どろぼうをしていた男は、昼間チラシを配る風を装って、自転車でこの村の畑を物色していた。」

「自分も昔農業をやっていた経験上、作物の事は詳しい。タケノコを盗ったり、丁度良い食べごろのものを見つけると、夜中にやってきて頭に取り付けた懐中電灯の明か

りで、素早く作物を盗んでいった。
ビニールハウスのメロンが、良い出来具合だと見た男は、今晚採りに行こうと決めた。

昼間に見ていた通り、食べごろのメロンは目星がついていた。さっきと素早くはさみで切って行く。十個は切っただろうか。それを乗ってきたセダンの車に積もうとした。すると強烈な明かりが男をいきなり照らし出した。

奥の方から人が五人やってきた。

「やばい！」と思った男は、急いで車に乗り込み、逃げ出した。後ろから車が二台とバイクが追いかけてくる。男はスピードを上げて逃げた。この先は坂になっていた。坂を滑るように降りる。とにかく逃げなければならぬ。ブレーキなどかけていられない。逃げ！」

坂の下の方に来たとき、車が大きくジャンプした。あっという間だった。

車が二・三回、回転したようだ。男はエアバックに挟まれ、動けなかった。

「このやろう、出る！」

若い男が、男のむなぐらをつかんで、外に引きずり出した。

田んぼの中に、車ごと突っ込んでいたらしい。隣にはバイクが頭から半分ささるように立っていた。――

「でっばり坂を降りて行ったんだ」

圭介が面白そうに言った。

「そうなんだよ。やっばりあの坂はすごいねえ。大事な坂だよ」

お母ちゃんが感心して首を振る。

「そうか？」

圭介にはそう思わなかった。

昔の人は、敵に襲われた時のことを考えて作った、貴重なでっばり坂だからね」

ママ様、その通りです！」

エドざえもんが、興奮気味に言った。

「あまり公にはしていないけど、ここら辺の人たちは、ご先祖様が忍者だったんだよ」

「へー、ウチも？」

圭介は初めて聞く話だった。

「きつと、そうだったと思うよ。普段は分からないようにみんな農業をやっていたけど、いざ、偉い人からお達しがきたら、忍者になるんだよ」

三津五郎さんも、そんなこと言っていた」

「カッコいいです！」

エドざえもんの目が輝いている。

あの坂は、敵が攻めて来た時にうっかり飛び出るように作ったのさ。今じゃ三郎じ

いちゃんの田んぼになっているけどね」

おじいちゃんの田んぼが、ぐちゃぐちゃになっちゃった」

綾子が、ぽつりと言った。

「そうなんだよね。犯人も捕まったことだし、みんなで弁償しようってことになった

んだよ」

「すばらしいです」

エドざえもんが、顔を輝かせた。

「おじいちゃんは、みんないい人たちだ、って喜んでた」

綾子も、嬉しそうだった。

綾子が帰った後、エドざえもんが、圭介とお母ちゃんに言った。
ぼくは、そろそろ帰ります」

「じゃあ、もう、忍者は習得できたんだね。エドちゃんは、頑張ってたものね」
お母ちゃんは、何度も「うんうん」とうなずいた。
でも、エドざえもんは、あまり嬉しそうではない。

「エドざえもん、どうしたの？ 帰りたくないの？ もっといてもいいんだよ。ねっ、お母ちゃん」

圭介は、お母ちゃんを見る。

「そういうわけにもいかないんだよ。エドちゃん、またいつでもおいでね」

お母ちゃんは、残念そうに言った。

圭介、ママ様、ありがとう。もうすぐ、パパの結婚式があるから行かないといけな
い」

「結婚？」

「ぼくのパパが、結婚するんだ」

エドざえもんの両親は、離婚したとは聞いていたが、驚きだ。

「新しいお母さんができるってこと？」

お母ちゃんも、驚きを隠せない。

エドざえもんは、うなずいた。

「前のママは？」

圭介が聞く。

「ぼくのママは、結婚しているよ。ママも夫婦で出席するんだ」

エドざえもんは、明るい。

「おやまあ、ずいぶん進んでいるんだね。変なこだわりがなくて、いいことだけど」
とお母ちゃん。

「うん、まあ、色々あったけど、悲しいときは過ぎた。忍者のおかげさ」

「けっぱだね。エドちゃんは、良い忍者になれるよ」

お母ちゃんは、力強く言った。

「ママ様ほどではありません」

「ははは、面白い子だね。エドちゃんが、いなくなったら寂しくなるよ」

「そうか、もう帰るのか」

圭介も残念そうだった。

圭介もママ様も、ありがとう。色々楽しかった。でも、一つだけ残念なことがある」

エドざえもんは、口をグイッと結んだ。

「なに？」

「忍者に会っていないんだ。日本に来たら忍者に会えると思っていたのに」

「三津五郎さんに会ったじゃないか」

「三津五郎さんは、婿養子だろう？」

「そうかもしれないけど、忍者学校の先生だろう」

「うん、そうだな」

エドざえもんは、答えた。

次の日の朝、エドざえもんは、ボーっとしながら起きて来た。

「おはよう、エドざえもん」

圭介が声をかけると、エドざえもんが、さっと振り向き圭介を見た。

圭介」

エドざえもんは、興奮しているようだった。

本物の忍者に会ったんだ」

「へっ？」

圭介は返事に困る。

圭介のおじいちゃんだよ」

「……？」

ますますわからない。

エドざえもんは、興奮したまま、夜に起こったことを話し出した。

——部屋に戻ると、エドざえもんは布団の上で考えた。

昔の忍者は、強い精神力で毎日を過ごしていたんだろうな。

ぼくもなりたい。強い人間に」

この旅行は、いい勉強になった。また、今度は、自分の力でここに来よう。そんなことを考えながら、眠ってしまった。

夜中にエドざえもんは、なんとなく目が覚めた。

明日帰るので、気持ちが悪く落ち着かなかったのかもしれない。

水でも飲んで寝ようと、起き上がった。夜なのに部屋に薄明かりが差していた。窓のカーテンが開いている。外をのぞくと満月が大きく光っていた。星もきらきらと輝いている。

きれいな、夜空だ」

ひとりつぶやいた。

星が、ひとつひとつ、大きく光だしエドざえもんの部屋めがけて、レーザー光線のように届いた。

あっ」

一瞬目がくらむ。よろよろとよろけて、足が何かにガタンと思切りぶつかった。

足の小指をぶつけて、息がでないくらい痛みが走った。

エド、修行をよく頑張ったな」

上の方から声が聞こえた。えっ？」と見上げた。

忍者が立っていた。見たことがある顔。そうだ圭介のおじいちゃんだ。

ありがとうございます」

エドざえもんは、あわてて両手をつき、頭を下げた。

ゆっくり頭を上げると、もう誰もいなかった。でも、畳の上に小さな星がいくつも転がっていた。そっとつまんだ。星の形をしている。

星だ、星が落ちて来た！」

エドざえもんは、感激に胸が震えた。——

圭介のおじいちゃんて、忍者だったんだろう？」

そうなんだろうな」

圭介はおじいちゃんを知っているけれど、普通のおじいちゃんだった。

そうなんだよ、おじいちゃん、着物を着ていたし」

忍者じゃなくても、着物は着るよ」

まちがいないよ。ほんとうにすごいことだよ！ 昨日はね、とっても月がきれいだったんだ。そして星も！」

エドざえもんの興奮はおさまらなかつた。

エドざえもんの、帰る時間が来た。

リュックの中には、修行に使った忍者の着物や道具でいっぱいだった。綾子も見送りに来ていた。

「ママ様、圭介、綾子、ハナ。色々ありがとう。ここでの経験は、とても面白かったし、ぼくの一生の宝物です」

エドぎえもんは、一人ひとり握手をする。

お母ちゃんとは、抱き合ってから別れを惜しんでいた。

「エドちゃん、駅まで送ってあげるよ」

お母ちゃんが、軽トラックに歩み寄った時だった。

「エド！」

道の方から男の人の声が聞こえた。

エドは声の方を振り向くと、ぱっと顔を輝かせた。

「パパ！」

エドは、男の人に駆け寄り抱き付いた。後は早口の英語で何やらしゃべりだす。それを圭介たちは、あせんとしながら眺めていた。

パパの横には、三十代くらいの金髪の女の人も立っていた。

「ぼくのパパです」

エドが紹介した。男の人はひよろりとしていて、頭がはげていた。でも顔はエドぎえもんとそっくりだった。墨字で日本と書かれたTシャツを着ていた。

はじめまして、エドの父です」

流ちょうな日本語だった。

彼女は、リリーと言います。私のフィアンセです」

リリーはにこやかに、握手した。なかなか感じのいい人だった。

ふたりはまだ結婚式はしていないけれど、新婚旅行で日本に旅行に来たという。北海道から沖繩まで一通り廻ったらしい。

帰りにエドぎえもんを誘って、一緒に帰ろうと計画を練っていたと言っていた。

今日エドぎえもんは、パパたちとホテルに一泊して、明日アメリカへ帰ることになった。

「エドぎえもん、ここでお別れだ」

圭介が言った。

「エドぎえもん？」

パパが不思議そうな顔をした。

「パパ、ぼくは忍者修行を卒業したんだよ。それで名前も、もらった」

「それはすごいな」

それに、ぼくは昨日忍者に会ったんだよ！」

「そいつは、フアンタスティック！ エド、いやエドぎえもん、君の日本旅行は、最高のものになったね」

「オエス！」

エドぎえもんが、興奮気味にうなづく。

「じゃあ、みなさんありがとうございます。お父ちゃんに宜しく。今度は圭介、ぼく

のところへ是非来てほしい」

「ニユージャーシーに？」

「是非、是非、来てください」

「パパも大歓迎だった。」

「なあ、お母ちゃん。エドぎえもんがね、昨日の夜、星が降ってきたって言うんだ。その星が部屋の中に入ってきて、それが朝になると砂糖の塊になっていたんだって。」

夢を見ていたんだと思ったけど、言わなかったよ」

エドぎえもんが帰った後、圭介はさっきの話をぶつぶつと語った。するとお母ちゃんは、はつととした顔をした。

それ、コンペイトウだよ。おじいちゃんの仏壇にお供えしたんだよ。それが倒れて中身が散らばっていた」

「コンペイトウを知らないのかな？」
「知らないんだねえ」

お母ちゃんは、眉をひそめた。

私は、エドちゃんのお土産に、コンペイトウを入れちゃったよ」

お母ちゃんは、ふーっとため息をついた。

夢を壊しちゃうね」

大丈夫だよ。本当の事をわかった方が、エドぎえもんのためだよ」

圭介は、明るく言う。

そうかね」

と言いながら、お母ちゃんは畑へ出かけて行った。

圭介、帰ったぞ！」

裕二だった。

お、帰ってきたか。楽しかったか？」

裕二は真っ黒に日焼けしていた。I ♡ H A W A I I とプリントされたTシャツを着ていた。

なんだ、クレイジーシャツじゃないのか」

おれは、これが気に入ってたんだ」

裕二は、自分の胸をさわる。

ハワイ最高だった。フラダンス見たぞ。海にも行った。人がいっぱいだった。……

これ、お土産だ」

裕二は紙袋を渡す。Tシャツやお菓子が入っていた。

ありがとう」

ハナが裕二に寄ってきてくんくんと臭いを嗅いだ。

はは、裕二は久しぶりだからな、ハナが、あやしんでるよ」

圭介が笑う。

ハナ、おれだよ」

裕二はハナの首を優しくもんだ。

あれ、こいつ首輪してる」

おれんちの犬になったんだ」

「へっ？」

裕二はきよとんとしている。そこへ自転車で綾子がやってきた。

圭介君、おじいちゃんにたくさんピワをもらった。基地で食べなさいって」

問題のピワか」

圭介が言うと、綾子はおかしそうにフフと笑った。

綾子の明るいしゃべりに、裕二は面食らっていた。

綾子は、おれらの仲間になったんだ」

おーん」

裕二は、いない間に随分変わっていることに、かなり戸惑っていた。

裕二のいないあいだに、色んなことがあったんだ。おれがでっぱり坂に落ちてしま

ってさー、そうしたらー」

圭介の話は長かった。その横で綾子が楽しそうに笑っていた。ハナは、庭にごろり

と寝そべっていた。

一週間後、エドざえもんからメールが届いた。

けいすけ、ママさま、おとうちゃん、せわになりました。
ぼくは、アメリカで忍者のしゅぎようをつつけています。
日本からもってきた、ぼくのにもつに☆のシュガーが、はいつてました。
すごい。

また、日本に行きたい。

エドざえもん

たどたどしい文章だった。

よく、これで首席とかいうよな」

圭介は、にんまり笑った。